イランにおける地方史研究の現況：
フーゼスターン史研究を事例に

杉山　隆一
早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手

Ⅰ．イラン地方史研究の特徴

イラン地域に関する歴史研究で盛んなジャンルのひとつに、地方史の研究がある。同地域では歴史的に地方史史料編纂の根強い伝統があり、古くから各地方で多数の地方史史料が著されてきた。その地方史史料を用いて、イラン国内外の多くの研究者が、通時的な地方の歴史の素描をはじめ、地方都市社会の再構成、中央権力との関係やそれぞれの地方特有の自立性の要因など、地方にまつわる多くの問題を検討し、優れた成果を残してきた。

現地イランでも当然ながら地方史研究は活況を呈しており、地方史史料の校訂出版や、新史料の発掘のみならず、地方の通史編纂や論集の刊行等も相次いでいる[1]。但し、イランでの地方史研究は、国内における「イラン民族」の足跡の称揚や、外国との係争地における古代からの「イラン文化」の存在の主張による領有権の正当性の誇示といった政治的な意図を持つことが指摘されている［八尾師 1997a: 305-308, 318-319］。こうした問題を抱えてはいるものの、中には在外の研究者にとってアクセスの困難な史料を利用した豊富な情報量を誇る現地ならではの研究をも含むため、看過できないものもある。

本稿では、現地におけるイラン地方史研究の現状の一端を看取すべく、イラン南西部フーゼスターンKhūzestān地方の歴史に関する現地での研究動向を概観したい。フーゼスターン史研究はイラン国内外で進んでいるとは言い難い状況にあったが、特にイラン国内で2000年前後を境に史料の校訂や研究書の出版が相次ぎ、中には現地でこそ成し得る研究も含まれる。以下、イラン国内で出版されたフーゼスターン史研究に関する書籍を紹介しながら、その中に見える研究の傾向や問題点等を簡単に指摘することで、現地における地方史研究の現況を探ってみたい。

Ⅱ．フーゼスターンの風土・歴史

現地イランにおけるフーゼスターン史研究の紹介や検討を行う前に、同地方の風土と歴史を簡単に紹介しておきたい。フーゼスターンとは、イラン・イスラーム共和国南西部のペルシア湾とイラク国境域に面した一帯を指す。同地方一帯は極めて高温多湿な気候であり、かつカールーン川等の河川から十分な水を確保できる点で、乾燥し水の確保が困難な内陸部とは一線を画す。この水の存在により、紀元前の早い段階から都市の存立が可能となり、スーサ（現シューシュShūsh）のようなイラン地域の中核となる都市の形成も見られた。イスラーム期以降にはそれまで繁栄していたスーサ等は衰退するも、アフヴァーズAhvāz、デズフールDezfūl、シューシュタルShūshtar、ホヴェイゼHoveyze（ハヴィーゼHavīze）といった都市が発展していった。

イスラーム期以後のこの地方では、15世紀におけるモシャアシャアMosha‘sha‘なる宗教勢力[2]の登場から顕著な変化が見られるようになる。その創始者セイエド・モハンマドSeyyed Moḥammad（1465年没）は、グラート的なシーア派マフディー主義の主張を掲げて支持者を獲得し[3]、さらに15世紀中葉以降ホヴェイゼを拠点としてロレスターンLorestānやさらにはバグダード近郊へと支配領域を広げた。この集団は、盛衰はあるも

のの同地方の支配に大きな影響力を持つ存在として20世紀まで半独立的な勢力を保持する。

加えて15世紀には、マーザンダラーンMāzandarān一帯に居住していたサイイドのマルアシー家がシューシュタル方面に移住する[4]。彼らの一門はフーゼスターン一帯のシーア派化に主要な役割を果たしたとの指摘がある［Luft 1993: 672］。さらに17世紀にはサイイドのヌーリー家なる一門もバスラからこの地に移住してきている。当該の地方では、こうしたサイイドの活動が、支配はもとより、宗教、さらには後述する著作の執筆のような学術[5]の点で社会の変容を促していくことになる[6]。

サファヴィー朝期に至ると、フーゼスターンは早くもシャー・エスマーイールShāh Esmā'īl期の1508年に同王朝の支配下に置かれ、モシャアシャアはその支配に服属する。それと共に、同地方の南部、特にホヴェイゼ一帯の地域はアラベスターン'Arabestānと呼ばれるようになる［Soucek 1984: 195］。16世紀以降には、オスマン朝がバスラ方面に勢力拡大を図ったため、フーゼスターン地方は両王朝の境界争いの中で双方が対峙する最前線のひとつと化し、サファヴィー朝は境域守護の観点から同地方を重要視した。こうした中、同王朝は後期に支配領域内のアミールの中で最高位のヴァーリーvālīなる位階を設け、フーゼスターンではモシャアシャアの支配家系にこの職位（vālī-ye 'Arabestān-e Ḥoveyze）を授与して厚遇する。そして、彼らはこのヴァーリーの職位の世襲化や、婚姻関係等でサファヴィー朝王族とも強い関係を持つようになる［Minorsky (trans. and ed.): 112］［Minorsky 1936: 162］［Luft 1993: 673］。また、王朝後期は1632年にシューシュタルに配置されたグルジア系ゴラームのヴァーフシュトゥー・ソルターンVākhshtū Soltānとその一族の勢力拡大[7]や、イラク方面からのアラブ系諸部族の流入も見られ［Soucek 1984: 203-204］、地方の勢力図が徐々に塗り替えられていった時代でもあった。

サファヴィー朝末期になると、モシャアシャアおよび当地の部族同士の内紛、さらには同王朝自体の崩壊により、18世紀中頃にはフーゼスターンは不安定な状態に陥る。その後、同地方はナーデル・シャーNāder Shāhの征服活動により引き続きイラン地域の王朝の支配下に置かれるが、ガージャール朝期に至ると各主要都市を拠点とした部族同士の内訌によって混乱が続き、20世紀初頭までには弱体化によりモシャアシャアの政治的な影響力は完全に失われる。19世紀末以降には入れ替わるようにして、フーゼスターンは英国の進出、その後の油田の発見により、国際的な紛争の舞台と化していくことになる。

フーゼスターンは、恵まれた自然環境がもたらす高い農業生産性、そして独自の宗教勢力やサイイド、ゴラーム、支配権の拡大を目指すアラブ系諸部族、オスマン朝、英国といった多様なプレイヤーが凌ぎを削った点で、イランの他地方とは若干趣を異にした歴史展開を遂げた地方であると言えよう。こうした歴史の展開から、同地方の研究には、ペルシア語のみならず、アラビア語、オスマン語史料、さらには欧文旅行記、英語・蘭語史料他、多様な史料の参照を念頭に置く必要がある。

Ⅲ．フーゼスターン地方史研究の動向：史料校訂と研究書の出版から

以上のような風土的な特徴と歴史的な経緯を抱えたフーゼスターンの地方史研究だが、イラン国内外のこれまでの研究の軌跡を最初期から1990年代前半、同年代後半からそれ以降の2つに分けて振り返ってみたい。特に後者に関しては、イラン国内の研究に焦点を当てて紹介を行う。

1. 1990年代頃までの研究史

最初期の研究としては、19世紀中葉の英国人レヤードA. H. Layardによる同地方の地誌を扱ったものが挙げられよう［Layard 1846］。20世紀に入ると、サイイドのヌーリー家出身のセイエド・アブドッラー・ジャザーエリーSeyyed 'Abd Allāh Jazāyerī（1700-1759年）による1755年までのシューシュタルの地方史*Taẕkere-ye Shūshtar*が校訂され、Bibliotheca Indicaシリーズのひとつと

して刊行される［Jazāyerī 1924］。サーサーン朝期から叙述がはじまるこの史料は、当地方の地誌等を含みつつ、先に示した15世紀以降の歴史を考える上で重要なマルアシー家の到来や、グルジア系ゴラームの活動の記事を含む史料である。その直後、欧人による一次史料を利用した本格的な研究として、独のカスケルWerner Caskelが雑誌*Islamica*に2点の論文を発表する［Caskel 1929］［Caskel 1934］。これらの論考は、前者は15世紀のモシャアシャアの宗教運動、後者は16世紀以後の同地方におけるヴァーリー職を扱い、今なお参照すべき価値がある。特に史料の面では、アラビア語、オスマン語史料[8]や欧文旅行記をも網羅的に参照し、さらに前者の論考ではその簡便な紹介も冒頭に付されている［Caskel 1929: 49-51］。その他、紀元前から20世紀前半までのフーゼスターン史を扱った［Soucek 1984］や、*Encyclopeadia of Islam*の第1版、第2版にもモシャアシャアなど、フーゼスターン関連の項目があり［Minorsky 1936］［Luft 1993］［Savory 1986］、概説として有用である。その他、部族に関してはアラブ系部族カアブ族Banū Kaʻbの動きを追った［Perry 1971］、サファヴィー朝期ホヴェイゼにおける貨幣について［Mathee 2001］が公刊されている。

一方、イラン国内における研究の嚆矢は、立憲革命史に関する著作で知られる知識人アフマド・キャスラヴィーAḥmad Kasravī（1890-1946年）の*Tārīkh-e pānsad sāle-ye Khūzestān*（1934年）である［Kasravī 1313kh.］。この著作では、15世紀におけるモシャアシャアのセイエド・モハンマドの登場から20世紀初頭までの500年間の当地の歴史を一次史料を駆使して追っており、基本的かつ概説的な研究として現在でも価値が高い[9]。

地方史史料の校訂については、1973年にマルアシー家サイイド、アラー・アル＝モルクʻAlā al-Molk[10]が17世紀後半に著した当地の地誌兼詩人伝史料*Ferdous dar tārīkh-e Shūshtar*［Marʻashī 1352kh.］が、また1984年にはヌーリー家サイイドのミール・アブドルラティーフ・ハーンMīr ʻAbd al-Laṭīf Khānが1800～04年に著した同地方の地方史兼著者のインド旅行記*Toḥfat al-ʻālam va ẕeyl al-toḥfe*も刊行されている[11]。

隣国イラクでもシャバッルShabbarが1965年にモシャアシャアに関するアラビア語の研究書を刊行している［Shabbar 1972］。イラク側での研究書の出版は、一時的であれ自国領内のバグダードまで支配領域を広げたこの宗教勢力の拡大の要因への関心の高さを示すものであろう。

当該の時期のフーゼスターン史研究は、欧米のものについては、事典等に収録される概説的な論考が多く、地域独自の事象に着目した専論は多くはなかった。また、現地における研究のうち参照すべきものとしては、早い段階に刊行されたキャスラヴィーの網羅的な研究が唯一であり、その他基礎史料として数点の校訂が出版されるに留まった。

2. 2000年以降から現在に至るまでのイラン国内におけるフーゼスターン地方史研究

2000年以降になると、イラン国内において史料の校訂や研究書の刊行が相次ぐ。研究書としては、まず2003年にヤズド大学の研究員であるランジバルMoḥammad ʻAlī Ranjbarが著した394頁に及ぶ研究書*Moshaʻsha'iyān*が出版されている［Ranjbar 1382kh.］。サファヴィー朝末期までのモシャアシャアを扱った同書は、ペルシア語・アラビア語写本も含めた一次史料の解題と、国内外の先行研究の批評を行った上で［Ranjbar 1382kh.: 15-42］、当時の政治・宗教の状況に触れつつ彼らの登場の背景や*Kalām al-Mahdī*に見える思想的特徴、さらにはイラン地域の政治の変化の中で地方勢力である彼らが被った影響やその対応等も示した詳細な研究である。

さらに2009年にはアーバダーン出身の歴史家ガイイェムʻAbd al-Nabī Qayyemによる*Pānsad sāl-e tārīkh-e Khūzestān va naqd-e ketāb-e <Tārīkh-e pānsad sāle-ye Khūzestān>-e Aḥmad Kasravī*なる研究書も出版された［Qayyem 1388kh.］。こちらも512頁にも及ぶ著作である。本書は、題名にも見える通りキャスラヴィーの研究の批判的検討を行った上で、彼が利用し得なかった史料や研究をも参照してフーゼスターン史を再構築しようというものである。先のランジバルの研究とは異な

り、叙述の対象範囲はガージャール朝期を含み、史料に関してもペルシア語旅行記や一部において英国史料等[12]をも参照している点で、新たな視点の取り込みへの意欲が覗える研究である。さらに史料校訂の面でも、2005年、2009年に*Taẕkere-ye Shūshtar*の新しい校訂がアフヴァーズよりそれぞれ刊行されている［Jazāyerī 1384kh.］[13]。

そしてここ数年では、新たな史料の校訂や、興味深い視点からの研究書の刊行など、さらなる研究の進展が見られる。まず、ヌーリー家サイイドの出自を持つセイエド・アブドルホセイン・ジャザーエリーSeyyed ʻAbd al-Ḥoseyn Jazāyerīが1830年頃に著した*Beẓā'at-e mozjāt*の校訂が2015年に刊行された［Shūshtarī 1394Kh.］。本書は、著者の家系、シューシュタルの地誌、聖廟、さらに河川の堰についての記述を含む史書で、先行する*Taẕkere-ye Shūshtar*や先述の*Toḥfat al-ʻĀlam va zeyl al-toḥfe*をも参照しつつ、堰など他の史料に見られない独自の情報を含んでおり、当地の河川・水利のあり方を考える上で格好の材料となろう。また、同じヌーリー家出身のサイイドによるシューシュタルにおけるキブラの方角に関して18-19世紀に執筆された2つの論考resāleも、*Do resāle dar qeble*なるタイトルで2014年に出版されている［Bāghbānān, et al. (eds.) 1394kh.］[14]。

さらに興味深いのは、当地方に移住してきたグルジア系ゴラームの現在に至るまでの歴史を私家史料の利用や聞き取りによって再構成した研究書*Nasab nāme: Selsele-ye ansāb-e gorūhī az gorjī-tabārān-e Khūzestān va barkhī-ye aqvām-e vābaste*の出版である［Qezelbāshān 1395kh.］。同書は、*Taẕkere-ye Shūshtar*に登場する前述のヴァーフシュトゥー、同じくサファヴィー朝期に移住してきたとされるアーブニーイェ・ハーンĀbnīye Khān[15]らを祖とするグルジア系ゴラームの末裔たちの活動と系譜を再構成し、付録として彼らに関する文書等の史料の写真版を掲載した研究書である。本書は、近代以後のフーゼスターン地方社会におけるグルジア系の人々のあり方を考える材料を提供するのみならず、イランにおけるコーカサス系のマイノリティに関する事例研究[16]として貴重なものと言えよう。

Ⅳ．現地におけるフーゼスターン史研究の傾向とその問題点

イラン国内における近年のフーゼスターン地方史研究は、以上のような史料校訂や研究書の相次ぐ出版で、徐々に活況を呈しつつあると言える。その中で注目すべきは、現地フーゼスターン出身の研究者が近年の同地方の歴史研究を牽引する存在となっている点である。例えば、*Bezā'at-e mozjāt*、*Do resāle dar qeble*、*Nasab nāme*は、いずれも主にフーゼスターンの歴史に関する書籍を出版するテヘランのArmaghān-e tārīkh社より刊行されている。筆者は2016年夏のテヘラン滞在時に同社を訪問し、偶然にもこれらの書籍の校訂や編集を行ったホセイン・バーグバーナーンḤoseyn Bāghbānān氏[17]にお目にかかることができた。デズフールの出身で、写本研究を中心に活動している独立研究者である同氏は、上記3タイトルのうち前二者について校訂を行い、最後の*Nasab nāme*に関しては、フーゼスターンのグルジア系の地方史家らと共に編集作業に携わっている。なお、筆者がお目にかかった際に、同氏はガージャール朝期に翻訳・執筆されたフーゼスターンのペルシア語地方史史料*Tārīkh-e Mosha'sha'iyān*[18]の校訂を進めているとのことであった。その他、同地方の歴史研究に関しては、先にも述べたアフヴァーズでの*Taẕkere-ye Shūshtar*の2種の校訂出版や、アーバダーン出身のガイイェムによる*Pānsad sāl-e tārīkh-e Khūzestān*の刊行など、そのお膝元での出版や、同地方出身の研究者の活躍が目立つ。

加えて、こうした研究者たちが、地方ならではの史料を用いて、独自の成果を上げている点も注意が必要である。*Nasab nāme*はまさにその典型であり、当地のグルジア系の人々の足跡を在地の史料を用いて振り返るような研究は、現地研究者ならではの成果であり、当地の地方史研究に新たなる視角を提供するものと言える。

もちろん、地元出身の研究者による地方史研究の推進は、同地方に限定されるものではないだろう。しかし、こうしたフーゼスターン史の近年の静かな盛り上がりは、地方史研究を志す在外の研

究者に、イラン各地での地方史研究の出版状況と参照の必要性をこれまで以上に示していると同時に、現地ならではの研究が登場しつつある現在では、研究推進のための現地研究者との関係構築の必要性の高まりをも感じさせる。

但し、研究の活況に伴って刊行されるこうした多数の現地での成果にも、問題がないわけではない。個別の検討は紙幅の都合もあり不可能だが、傾向として看取できるのは、研究書に関しては、先行研究として挙げられる研究文献の取捨選択の恣意性や、そしてその批判から導き出される著者の問題意識が不明瞭な点である。ゆえに、論点が曖昧にしたまま情報が羅列されるのみで、読み進めても研究としての意義が見えて来ない感がある[19]。同様に史料校訂も、新しい校訂出版の場合には、先行する校訂との違いが明らかでない場合もある[20]。

また、参照される史料が基本的に国内所蔵・刊行のペルシア語、アラビア語写本・校訂史料、翻訳された外国人旅行記に限定されている。現地での研究や史料校訂における国外所蔵の写本をはじめとした史料の利用は、テヘラン大学図書館のマイクロコレクションに含まれるもの[21]やガイイェムによる英国史料の参照を除き皆無である[22]。先にも指摘した通り、同地方についてはイランの勢力のみならず、アラブ系部族、さらにはオスマン朝、英国、海上でのオランダといった多様な勢力がせめぎ合う場であったが故に、多様な言語による史料が残されている。もちろん、現地の研究者にとってこうした国外所蔵の史料へのアクセスには困難が伴うというハンデも認められるのも事実である。しかし、今後現地の研究者が同地方の歴史研究に新たなる視角を見出すためには、在地の史料の発掘等だけでなく、国外の史料群の利用、および残された様々な言語の史料を包括的に扱うことも必要となろう。

現在のフーゼスターン地方史研究の盛り上がりは、先述のような問題を抱えてはいるものの、我々在外の研究者が当該の地方を対象として研究を行う際に、多くの検討すべき材料や新たな視点を提供してくれるという点で極めて有益なものとなっている。残念ながら現地でのフーゼスターン研究の最近の成果は、外国の研究で参照されることは多くない[23]。しかし、現地の研究者の成果は、外国人研究者が上手に摂取して自らの研究に裨益するように結び付けていくことで、内外のイラン史研究の進展が効率的に促されるという相乗効果が期待されるがゆえに、今後積極的な活用が望まれると言えよう。現地でのフーゼスターン史研究の今後のさらなる進展に期待したい。

註

1 1997年の時点までにイランで出版された地方史・誌に関する書籍の総覧として邦文で［八尾師 1997b］がある。同氏はその後も地方史・誌に関連する書籍の蒐集を続けており、1379kh.年（2000/01年）までに2325点を集めている［八尾師 2003:99］。

2 モシャアシャアの名称の意味ははっきりしないが、sha‘sha‘なる語が持つ「発光」といった意味から、光に関連するものと考えられている［Luft 1993: 672］。

3 この人物は、セイエドの名が示す通り7代イマーム、ムーサー・アル＝カーゼムMūsā al-Kāẓemの末裔である。彼が著した*Kalām al-Mahdī*は、初期のモシャアシャアの思想を示した著作であり、同書からはそのマフディー主義的な傾向が読み取れる［Minorsky 1936: 161］［Luft 1993: 672］。なお、Ranjbar［1382kh.: 17］によれば、同著作の写本は2点（議会図書館、マルアシー図書館蔵）確認されているが、未だ校訂出版されていない。

4 4代イマーム、ゼイノルアーベディーンZeyn al-‘Abedīnから分岐したサイイドの一門。初期はマーザンダラーンにて14世紀に地方王朝を建設し、その後イラン他地域のみならず、インド方面にも移住して各地で活躍する。シューシュタルのマルアシー家はサファヴィー朝治下で政権の要職に就任する事例も見られる。同家についての概説としては［Calmard 1991］がある。

5 Shūshtarī［1363kh.: 96-120］にヌーリー家の系譜と人物の事績に関する記述がある。同家はムーサー・アル＝カーゼムから分岐したサイイドの家系で、1640年生まれのセイエド・ネエマトッラーSeyyed Ne‘mat Allāhなる人物がバスラから一旦インドへと避難した後にシューシュタルへと移住し、その祖となる。本文中で後述するセイエド・ア

ブドッラー・ジャザーエリーらの地方史史料の著者を輩出したのがこの家系である。

6 当地方に移住してきたマルアシー家の成員は、*Majāles al-Mo'menīn*で知られるガーズィー・ヌーロッラー・マルアシー・シューシュタリーQāzī Nūr Allāh Mar'ashī Shūshtarī（1549-1610年）といったインドに移住して活躍した知識人を輩出している。ヌーリー家出身の著述家に関しては、本文中にて後述する。

7 この人物に関しては［前田 2009: 228］に詳しい。なお、この人物の綴りは史料によって異同がある。本稿では［Shūshtarī 1924］に従う。

8 キャーティブ・チェレビーKâtib Čelebī（1657年没）による地理書*Cihânnümâ*など。同書は先述のレヤードも参照している。現在ではこの他にも参照すべき史料があろう。

9 同書には、出版直後に出された書評［Minorsky 1937］がある。また、キャスラヴィーには*Mosha'sha'*（1945年）なる著作もあるが、同書は*Tārīkh-e pānsad sāle-ye Khūzestān*のモシャアシャアに関する部分の増補改訂版である［岩見 2005: 96］。

10 著者は先述のカーズィー・ヌーロッラー・マルアシー・シューシュタリーの息子。ムガル朝でシャー・ショジャーShāh Shojā'の家庭教師を務めるなどした人物として知られる。

11 著者は1758年シューシュタル生まれ。イラク・イラン地域各地を巡った後、ブーシェフルからマスカット経由で1788年ベンガルに向かい、1800年頃同書を著し、ミール・アーラムMīr 'Ālam（本名Abū al-Qāsem Mūsavī Shūshutarī。その父がイランから移住してきた人物で、本人は18世紀末から19世紀にかけてインドのニザーム王国で活躍した知識人）に献呈する。本編の成立後、1804年にアーガー・アフマド・ベフバハーニーĀqā Aḥmad Behbahānī（マジュリスィー一門の末裔で、18世紀末から19世紀にかけてイラク、イラン、インドを遍歴した旅行家。その旅行記に*Mer'āt al-Aḥvāl-e Jahān-namā*がある）の求めで作成した続編もあり、校訂はこの続編も含む［Storey 1970(repr.): 750-752, 1123-1124, 1130］。

12 ［Qayyem 1388kh.: 350］以降で、イギリス東インド会社報告等の史料が参照されている。

13 後者の2009年刊行の校訂に関しては、本稿脱稿時までに参照し得なかった。

14 同書所収の2つの論文とは、Seyyed 'Abd Allāh Jazāyerī（1704-1759年）著*Resāle dar taḥqīq-e qeble-ye Shūshtar*とSeyyed Ḥasan Shūshtarī Jazāyerī（1835-1905年）著*Resālat al-Ḥisām fī ma'arifat qiblat al-Islām*である。

15 本書の本文および編者の説明によれば、この人物はヒジュラ11世紀にシーラーズからシューシュタルに移住したとされる。また、アーブニーイェなる語はアーディーネĀdīneが転化した語である、との指摘もある［Qezelbāshān (eds.) 1395kh.: 65, 104］。そしてこの人物の息子とされるパルヴィーズとは、*Taẕkere-ye Shūshtar*に登場するパルヴィーズ･アーガー･ゴルジーParvīz Āqā Gorjīなる人物であると述べる［Jazāyerī 1924: 113］が、父のアーブニーイェについての詳細は不明な点が多い。

16 なお、本邦では［前田 2003］が、エスファハーン近郊のグルジア人集落フェレイダーン･シャフルについて、サファヴィー朝以後現代に至るまでの同集落出身者の活動を中心に簡単に紹介している。

17 同氏はフーゼスターン史以外でもベルリンで1924年に校訂が出版された*Selselat al-nasab-e Ṣafavīyye*の新しい校訂を出版している［Zāhedī 1395kh.］。同書は、旧校訂では参照されなかったテヘランのメッリー図書館所蔵の写本を利用して行った新たなる校訂を掲載し、さらに解説を付したものである。

18 ガージャール朝期に作成された本ペルシア語史料［Shūshtarī］の解題は［Ranjbar 1382kh.: 28-31］に詳しい。この［Shūshtarī］は、アラビア語を主に用いて執筆されたモシャアシャアの同時代史料［Mūsavī］の翻訳とされるが、前出のランジバル氏は高い評価を与えていない［Ranjbar 1382kh. 31］。

19 その具体例を数点あげる。Ranjbar［1982kh.: 41-118］では14世紀におけるサルバダール登場以降見られた諸宗教勢力の台頭を挙げ、その中にモシャアシャア登場の位置づけを試みているが、当時のこれら宗教勢力についての見解は、例えば［Arjomand 1982: 66-89］など、以前から見られるものと大きな差はない。また、Qayyem［1388kh.: 19-37］では、キャスラヴィー以外の一次・二次文献の紹介・論評が一か所に順不同の形で行われているために、筆者自身が考える先行研究の問題点が不明瞭なままとなっている。

20 *Taẕkere-ye Shūshtar*の新しい校訂二種だが、参照し得た前者［Jazāyerī 1384kh.］については校訂に利用した写本に関する言及が一切ない。

21 ジャアファル・ホセイニーJa'far Ḥoseynīが15世紀中葉に著した*Tārīkh-e Kabīr*（テヘラン大学図書館所蔵ペルシア語マイクロフィルムNo. 4775）が該当する。ランジバルはモシャアシャア勃興期の様子を記す史料として評価している［Ranjbar 1982kh.: 32-33］。

22 こちらも具体例を挙げれば、まず［Jazāyerī 1394kh.］の校訂はイランの議会図書館、メッリー図書館所蔵の2点の

写本を用いたものであるが、その他大英図書館にも写本が所蔵されている（Add. 23535）［Rieu 1879 215-216］。次に、ランジバル氏はカスケルの独語の研究を参照し、彼によるオスマン語史料の参照を評価するも、自身は翻訳の旅行記史料等を除き、ペルシア語、アラビア語以外の史料を参照していない。

23 外国人研究者が現地における近年のフーゼスターン史研究を参照している例としては、管見の限り［Ranjbar 1382kh.］がマテー氏による研究［Mathee 2006: 61］［Mathee 2012: 227-228］に引用されているに過ぎない。

参考文献

岩見隆（編）2005.『東洋文庫蔵　キャスラヴィー関係加賀谷コレクション解説目録』財団法人東洋文庫

八尾師誠 1997a.「国民国家イランにおける「地方史・誌」の出版と中央・地方関係」後藤晃・鈴木均（編）『中東における中央権力と地域性 : イランとエジプト』アジア経済研究所、305-350頁

八尾師誠（編著）1997b.『イラン「地方史・誌」刊本総覧』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

八尾師誠 2003.「イラン・イスラーム共和国と“地方史・誌”の出版状況」『現代の中東』、34、97-113頁

前田弘毅 2004.「グルジア村の『発見』－ラド･アグニアシュヴィリの旅」岡田恵美子他（編）『イランを知るための65章』明石書店、263-267頁

前田弘毅 2009.『イスラーム世界の奴隷軍人とその実像　－17世紀サファヴィー朝イランとコーカサス』明石書店

Arjomand, Said Amir. 1984. *The Shadow of God and Hidden Imam*, Chicago: University of Chicago Press.

Bāghbānān, Ḥoseyn, et al. (eds.). 1394kh. *Do Resāle dar Qeble*, Tehrān: Armaghān-e tārīkh.

Carmard, Jean. 1991. “MAR‘ASHĪS”, C. E. Bosworth, et al. (eds.), *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Leiden: E. J. Brill, vol.6, pp.510-518.

Caskel, Werner. 1929. “Ein Mahdī des 15. Jahrhunderts.: Saijid Muḥammad ibn Falāḥ und Seine Nachkommen”, *Islamica*, 4, pp.48-93.

Caskel, Werner. 1934. “Die Wālī’s von Ḥuwēyze”, *Islamica*, 6, pp.415-434.

Jazāyerī, ‘Abd Allāh ebn-e Nūr al-Dīn. 1924. *Taẕkere-ye Shūshtar*, Khan Bahadur Maula Bakhsh and Mohammad Hedayat Husain (eds.), Calcutta: The Asiatic society of Bengal.

Jazāyerī, ‘Abd Allāh ebn-e Nūr al-Dīn. 1384kh. *Taẕkere-ye Shūshtar*, Moḥammad Mehdī Sharaf al-Din (ed.), Ahvāz: Mo’taber.

Kasravī, Aḥmad. 1313kh. *Tarīkh-e pānsad sāle-ye Khūzestān*, n.p.. (Book Review: Minorsky, V. 1937. “Tarikh-i pansad sala-i Khuzistan, Tehran, 1313/1934”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 8-4.)

Layard A. H. 1846. “A Description of the Province of Khuzistan”, *The Journal of the Royal Geographical Society of London*, 16, pp. 1-105.

Luft, P. 1993. “MUSHA‘SHA‘”, C. E. Bosworth, et al. (eds.), *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Leiden: E. J. Brill, vol.7, pp.672-674.

Mar’ashī, ‘Alā al-Molk Ḥoseynī Shūshtarī. 1352kh. *Ferdous dar tārīkh-e Shūshtar va barkhī az mashāhīr-e ān*, Mīr Jalāl al-Dīn Ḥoseynī Moḥaddeṣ (ed.), Tehrān: Anjoman-e āṣār va mofākher-e farhangī.

Mathee, Rudi. 2001. “Mint Consolidation and the Worsening of the Late Safavid Coinage: The Mint of Huwayza”, *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 44, pp.505-539.

Mathee, Rudi. 2006. “Between Arabs, Turks and Iranians: The Town of Basra 1600-1700”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 69-1, pp.53-78.

Mathee, Rudi. 2012. *Persia in Crisis: Safavid Decline and the Fall of Isfahan*, London: I. B. Tauris.

Minorsky, V. 1936. “MUSHA‘SHA‘”, M. TH. Houtsma, et al. (eds.), *Encyclopeadia of Islam*, 1st ed., Leiden: E. J. Brill, vol. 9 (supplement), pp.160-163.

Minorsky, V. 1940. (trans. and ed.), *Tadhkirat al-Mulūk: A Manual of Ṣafavid Administration*, London: Gibb Memorial Trust.

Mūsavī, Seyyed ‘Alī Khān Mosha‘sha‘ī, *Tārīkh-e Mosha‘sha‘iyān Safarnāme-ye Seyyed ‘Alī*, Ketābkhāne-ye madrese-ye ‘Ālī-ye Shahīd Moṭahharī (Sepahsālār-e qadīm), MS. No. 1513.

Perry, John. 1971. “The Banū Ka’b: an amphibious brigand state in Khūzistān”, Jean Aubin (ed.), *Le Monde Iranien et L’Islam*, vol. 1, 1971, pp.131-152.

Qayyem, ‘Abd al-Nabī. 1388kh. *Pānsad sāl-e tārīkh-e Khūzestān va naqd-e ketāb-e <Tārīkh-e pānsad sāle-ye Khūzestān>-e Aḥmad Kasravī*, Tehrān: Akhtarān.

Qezelbāshān, Amīn et al. (eds.). 1395kh. *Nasab nāme: Selsele-ye ansāb-e gorūhī az gorjī-tabārān-e Khūzestān va barkhī-ye aqvām-e vābaste*, Tehrān: Armaghān-e tārīkh.

Ranjbar, Moḥammad ʻAlī. 1382kh. *Moshaʻshaʻiyān: Māhiyat-e fekrī –ejitemāʼī va farāyand-e taḥavvolāt-e tārīkhī*, Tehrān: Āgāh.

Rieu, Charles. 1879., *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, vol.1, London: British Museum.

Savory, R. M. 1986. "KHŪZISTĀN", C. E. Bosworth, et al. (eds.), *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed.,.Leiden: E. J. Brill, vol.5, pp.80-81.

Shabbar, Jāsim Ḥasan, 1965. *Muʼassis al-dawlah al-Mushaʻshaʻīyah wa-aʻqābuhu fī ʻArabistān wa-khārijihā*, Najaf: Maktabat al-Aʼdab.

Shūshtarī, ʻAbd al-Ḥoseyn ebn-e ʻAzīz Allāh Jazāyerī. 1394kh. *Beẓāʻat-e mozjāt*. Ḥoseyn Bāghbānān (ed.), Tehrān: Armaghān-e tārīkh.

Shūshtarī, Nūr al-Dīn Moḥammad, *Tārīkh-e Moshaʻshaʻiyān*, Ketābkhāne-ye Majles-e Shourā-ye Eslāmī, MS. No. 8934.

Shūshtarī, Mīr ʻAbd al-Laṭīf Khān. 1363kh. *Toḥfat al-ʻālam va ẕeyl al-toḥfe*, Samad Movahhed (ed.), Tehrān, Ṭahūrī.

Sourek, Svet. 1984. "Arabistan or Khuzistan", *Iranian Studies*, 17-2/3, pp.195-213.

Storey, C. A. 1970 (repr.). *Persian Literature: A Bio-Bibliographical Survey*, vol.1 part 1-2, London: Luzac and Co.

Zāhedī, Ḥoseyn Pīrzāde Ebdāl. 1395kh. *Selselat al-nasab-e Safavīyye: bar asās-e noskhe-ye nou-yāfte movarrekh be 1099 qamarī dar Ketābkhāne-ye mellī-ye Tehrān*, Ḥoseyn Bāghbānān (ed.), Tehrān: Armaghān-e tārīkh.